

漢法苞徳塾資料	No. 010
区分	92年夏期合宿塾長講話
タイトル	医療体制への不信や不満の分析
著者	八木素萌
作成日	

☆医療体制への不信や不満を分析してみると

- a. 健康保険診療制度の診療制限に関する不満
- b. 病院に医療チームの傲慢さや不遜さに対する不信・不満
(説明要求に対する態度→事実上の強制退院や差別的取り扱いなど)
- c. 臓器移植や遺伝子操作に見られるものへの異和と批判
- d. 臨床的体制の不合理性への批判・不信～全てをパラメジカル化して良いのか
- e. 薬の副作用や手術のミスに関して生起している問題
- f. 科学方法論・ビッグサイエンス体制・研究方法論などの問題性
- g. 生命・自然に対する態度をめぐる問題
- h. 東洋医学などに対する態度の不遜さ
- i. 薬
 - 1：在来の知識の臨床的な検証と洗い直し
 - 2：生化学的に確認された方法によるもの・抗生物質、化学療法剤、放射線利用などの水準
 - 3：膜化学・遺伝子工学・ゲノム解析・免疫反応の利用による検証・レセプター（レセプター）
やイオンチャンネルとイオンポンプなどの分子生物学や量子生物学とか量子化学の水準からの根拠で試みられる薬物
 - 4：酵素化学・免疫反応の利用による検証の化学などに由来する薬物。－のような渾然とした水準のままの運用
- j. 手術と薬物と物理的（音・光・熱・冷・圧・牽引・香り・リズム・その他の物理的刺激）処置と心理的情緒的な処置と栄養的（食品）対応などが医師を動員し運用する方法手段である。それらの中でも、攻撃的・排除的な方法態度が基調になっている。故に、陰虚証は「気のせいでしょう」にされ、陰実証には陽実証の治療と異なるところが見られない、ということになっている。手術を行なうときに、患者や家族から、ある書類を取っておく、失敗による後遺症や死亡の、責任を問わないことが主旨になっている書類である、医源病を起こした場合、責任から免除されるような法的措置である、これは、自己矛盾ではなかろうか。
- k. 研究と臨床的処置、学問と臨床現場、理論と実情、これらの間の甚だしい乖離。
- l. 様々な周辺科学との関連、最近の生理学的な成果には、動物の仕組みから学ぼうとする、非医学・

非生理学の分野からの、大きな達成が見られる。体内の遊離蛋白体に、半導体の性質がある事の発見、電池・静電工学の尖端放電の研究、視細胞の構成と視覚の関係、脳機能の動的状態の光学的反応の把握方法、NMR（磁器共鳴・原子スピンを利用した）スキヤンの達成、各種の精密センサーの開発、などなど。

以上のような多面的な問題がある。

☆ヒヒの肝臓を人に移植したニュース・等

今まで人の肝臓を移植して成功した例は無い（'92・9・7に死亡が他の動物の臓器移植の例の中では最も生存期間が長い71日の生存であるとのコメント付きで発表された）。心臓移植も同じである。骨髄移植に骨髄を提供した人が意識喪失したまま回復しない事件が報じられた。麻酔事故であると言われていたが、果してそうなのであろうか？

☆アメリカでのトリプトファン事件について～バイオ食品に対する規制の問題にからんで

昭和電工が1回の突然変異誘発と4回の遺伝子組み替え操作で作られたトリプトファン生産菌を用いて作った健康食品で、「米国での被害者1510人うち死者38人、ドイツ・フランスなど欧州での患者約100人、日本でも10人前後の患者がいると見られる」事件を引き起こした。「腕や足などから激しい痛みが起こり、赤く腫れ、同時に血液中の好酸球が異常に増える」好酸球増加・筋肉痛症候群（EMS）の発症事件で、81年にスペインで起きた油症に良く似た症候であり、原因物質として2種類が判明したが毒性が明らかな方の「フェニルアミノアラニン」は、スペイン油症の原因物質の1つの「フェニルアミノ・プロパンジオール」に近い化学構造で、これは「多量のトリプトファンとの相乗作用の公算がある」と言う。

『科学朝日・9月号』の記事編集者は「作為的に突然変異や組み換えを起こした菌は、目的とする機能以外の部分でも変異や障害を起こしている可能性がある。その結果、特異な物質を生産する懸念があり、…」と記述している。

☆『科学朝日・9月号』には「ナノテク・ライフ20XX年」と言う特集が組まれている。ナノメートル単位（10億分の1メートル……ウイルス100ナノ、たんぱく質10ナノ、DNA二重らせんの直径1ナノ、原子0.1ナノ）のテクノロジーに、手放しの夢想的な楽観をもとにした未来構想を展開した、K・E・ドレクスラーの『創造する機械』の主張を検討する特集である。分子アSEMBラー（極微コンピューター内蔵・自動・自走でナノ単位の仕事をする）が障害されたたんぱく質を修復したりDNAやRNAを組み替えたりすると言うのであるが、九大助教授・吉岡 斉（科学史・科学社会学）は専門の立場から、K・E・ドレクスラーに峻烈な批判を加えている。

☆『セル・6月25日号』の記事では「人などで免疫システムの多様性をつくるのに重要な遺伝子と同じものがショウジョウバエにあることがわかった。…意外なことに、この遺伝子からつくられるたんぱく質は、神経系の発生と関連しており、その関係と起源が改めて問われている。…京都大学医学部の古川貴久らは、ショウジョウバエでも、この免疫グロブリンの組み換え認識配列結合たんぱく質と同じものがある…ことを発見した。その遺伝子が染色体上でどこにあるかを調べたところ、既知のヘアレス遺伝子の抑制遺伝子（ヘアレス遺伝子に変異があっても、正常な表現型を示すようにする遺伝子）であることがわかった。…」というのである。

もともと皮膚と神経系は外胚葉系のものであるが、間葉系の免疫細胞・白血球が表皮のケラチノサイトで完全に成熟して、その機能を完遂できるようになるのであり、発生学的にはもっとも分化度が低いと言うこともできるマクロファージとの緊密にコミュニケーションしながら、免疫機能を完遂して行くことは判明していたのであるから、「さもあつた」とも言うこともできようが、神経系と免疫系が極めて緊密な調整関係にあるようだと言う事が、遺伝子レベルからも示唆されているものであろう。

これは、札幌の麻生病院（脳神経外科）での成果と無関係であろうか？

また『魔弾の効用を超えて』を書いたB・ディクソンが「難治」「不治」とされる病の場合には、メンタルな側面が非常に大きな意味を持っている事を示唆する例を、その著書に記述した事と、無関係であるのだろうか？

☆二つの生命観～人間機械論の系譜とそのアンチテーゼ

〈い〉科学技術が獲得して来たものは、宇宙・少なくとも地球の歴史が極めて長い時間と途方もない無駄を積み重ねてきた上での創造物としての「生命」に、その自然の幽久の時間が作用しているものにとって代われることをやれると思ってもよいのか？ こういう問が実は突き付けられている、そう考えるべき時代が、我々が生きて生活している時代ではなかろうか？

「神に代われる所まで人は発達したのだ」と言う人々の立場と、そのような思想は自然に対する恐るべき傲慢さであるとする人々の立場と、この二つの二者択一が、今日に生きているもののテーマではなかろうか？

このように把らえると、ノーバート・ウィーナーが『神・人・悪魔』で突き付けた問題は、そのまま今迄引き継がれてきていることが、明瞭である。

〈ろ〉この問題を「生命観」の問題として提起するならば、「人間機械論」の系譜と、それと異なる系譜（宇宙との同調・共鳴・の思想）と、何れを選択するか？ と言うことであろうが、ことは簡単なものではあるまい。様々な宗教や土着的医療やの生命観を、丹念に検討してゆく必要があるからである。私の手に負える問題ではないので、少なくとも東洋医学とその周辺の生命観の特質を、「人間機械論」と対照して見たいものである。

〈は〉ノーバート・ウィーナーが『神・人・悪魔』で突き付けた問題は近代科学の行き着く先は、「人」は「神」に代わり得るのか、「悪魔」として宇宙に君臨してしまおうとするのか、と言う深刻な問題であることを見ているのである。それは文明のありように対する「問い」そのものである。ヒッピーの発生や、「ゼン」や「タオ」や「ヨガ」や「ホキの哲学」などへの

新しい注目は、現代文明への、深刻な・無意識的な面も孕んでいる「問い」であり「時代の苦悩の表現」でもあるものと同質なものを、まさしく、哲学的に、コンピューター的世界的・歴史的な草分けをもっとも重く担った人が、提起したのである。

〈に〉「ゼン」や「タオ」や「ヨガ」や「ホキ」など、これらに見られる『「自然と人」の問題・「知識と知恵」の問題』についてのパラダイムを、深刻に考察し、求道しなければなるまい。

〈ほ〉B. ディクソン（ワールド・メディスン誌の副編集長を経てのちニュー・サイエンティスト誌の編集長を長く務めた、科学ジャーナリストとして活躍～英国科学ライター協会の元会長・英国科学振興協会評議員）は『近代医学の壁－魔弾の効用を超えて』（1978年）を著述した。それは医学思想への近代最大の衝撃と批評された。

☆こんな問題を考えている最中の8月24日の朝のニュースで、過去5年間に輸血事故による死者は約170名に及ぶことが明らかになったが、これは輸血血中の白血球によって、患者の身体が攻撃されて死亡するに至ったものである。従って、今後は輸血血を放射線で処理することによって、このような事故を防ぐようにすると言うのである。

此の説明は適切で正しいものであろうか？私は甚だ疑問であると思う。血液型の適合か否かは、現在判明している全ての要素で調査されているのだろうか？A B O式・r h式を含めて血液型の様式は他にも数種類があつて、現在分かっている全部の様式を通じて適合する血液型は、500億分の1、とも800億分の1とも言われると計算されているのに、輸血時の適合調査は、全ての血液型様式に渡ってはいないのである。

このような問題と、今回の厚生省の対策（放射線を照射して処理した血液を用いる）との関係を明確にすべきものであろう。何かうさん臭い感じが否めないのである。

しばしば薬品の有効性や副作用の問題では、驚くべき腐敗としか言いようがない事件が報道される。

これらは、現代の深刻な問題である所のビッグサイエンスが孕んでいる問題と、深く関わっているものと言えそうである。